

ローカル・ガバナンスに よる地域福祉に関する 研究3

(久保健太氏)

「研究成果報告書」を 読む手がかり

はじめに

久保健太氏に委託している「ローカル・ガバナンスによる地域福祉に関する研究」がいよいよ最終報告となりました。本研究は今回で3期目の委託となります。1期目の2017年「研究1」が開始されてから6年にわたる研究の集大成とも言える「研究成果報告書」となります。久保氏の研究では、当初より研究者と保育者の往還的な研究を継続してきました。3期目の本研究では、往還を越えて研究チームに集まった大人たちが年齢、職種、専門性などさまざまな垣根を越えて、子どもについて保育について共に記録を記し、考察し、議論を積み重ねてきました。それは、自分たちの保育を自分たちの

手で作るといふ民主的な組織運営の実験でもあったように思えました。

研究チームの試行錯誤からは、保育者のありようや、保育者が育ち合うことができる組織づくりの可能性が見えてきました。新任の保育者がすぐに辞めてしまう、若い保育者が力を発揮しきれない、業務を遂行することはできているが生き生きと保育ができないなど、保育者の育ちや組織づくりは多くの保育園・子ども園で課題になっているのではないのでしょうか。豊かな「子どもまんなか保育」をつくるためには、これらの課題を乗り越え、豊かな保育者集団をつくっていくことが大切です。それは「子どもまんなか社会を実現しよう!」を掲げ、始動していることも家庭庁の動きとも通じていくと思います。

保育者の育ちのライフサイクル

先に述べた保育者の育ちの課題を、久保氏はエリク・H・エリクソンの人間関係の育ちの理論を使って説明しています(表1)。

第一期では信頼感、安心感を培うことが大切です。応答するということを通して、「なんでも相談できる」「どんな些細なことでも話せる」という安心感を培っていくことができると、その安心感を土台にして自分で決めることができるようになっていきます。それが第二期の育ち

です。そのような第一期から第七期まで育ちのサイクルを表1に記していますが、本研究ではその中でも特に「第四期の人間関係」をいかにつくるのが示唆されています。

第四期は、保育者のありようを開花させる時期。そのために「広い世界」へと出ていくことが大切です。久保研究チームには「第四期」の人と「第六期」の人が集まり、そこで対話を繰り返してきました。「第四期」の人にとって久保研究チームは、自分の保育園から飛び出した「広い世界」そのものです。久保チームには第四期の保育者が3人いましたが、その保育者たちが園を横断して出会い、第六期の人たちと共に学ぶという体験の記録が報告書に記されています。詳しい内容は報告書を読んでいただくことにして、この読む手がかりでは、報告書には記されていない第四期の3人へのインタビューを紹介したいと思います。インタビューは、久保研究のすべてが終了した後それぞれ個人で実施させていただきました。

関根優香さん(うーたん保育園)の「第四期」

報告書では、4年目の保育者の関根さんの記録が紹介されています。久保研究チームという広い世界に出ることで、今まで「わかっていたつもり」になっていたことが「わからなくなる」という学びを彼女は経験します。広い世界を知

表1

第一期	応答してもらえると 信頼感・安心感を 培う。
第二期	信頼感・安心感を土台にして、 自己決定 をする。
第三期	自己決定を土台にして、 自分（たち）がイメージする世界を、自分（たち）の手で（自分たちが主導して） つくっていく。自分（たち）の手で計画を立て、役割を分担し、約束をつくっていく。
第四期	自分（たち）の世界をつくる際に、「 広い世界 」へと出ていく。そこで、自分の大事にしたいこと（こだわり）を見つける。そのこだわりを土台にして、道具・技術・知識、すなわち専門性を獲得する。「 保育者としてのあり方 」を 開花 させる。そうして、自分の仕事を「 作品 WORK 」へと仕上げていく。
第五期	「保育者としてのあり方」を超えて、「 人としてのあり方 」の 軸を立てる 。「働きたい」「生きがい」を見出していく。
第六期	「人としてのあり方」の軸を共有する人たちと パートナー になっていく。
第七期	パートナーとともに 次の世代を育てる 。

り学ぶことの楽しさを知るといふ勤勉性と、自分の小ささを思い知るといふ劣等感の感覚のせめぎ合いが生じます。そこから彼女は、小さい自分を受け入れながら勤勉性を発揮させていくという成長を獲得しています。インタビューでは、保育士になる前や保育士になるきっかけから聞きました。

「将来保育士になるということが全然定まらずに、大学で授業を受けていくうちにもいろいろあつて思う内容がたくさんあつて興味はあつたので、そのまま（保育の道に）進んできたみたいなきな感じなんです。保育士になろうって思った瞬間はあんまりなかったかも知れないです。保育士になるといふよりは、自分が行きたいところに就職したいと思ってるいろいろな園に見学に行って、それで今の保育園に出会い、なんかすごくいいなって思えて就職して、それで今、保育士をやっているという感じです。

その性格があんまり保育士に向いてないなって自分自身で思ったりもしました。今は3年を乗り越えて保育園で結構楽しくできていことも見つかつてきたので、続いているし、これからも続いていくという感じがしています。ちゃんとこう目標を定めて生きていくぞっていうよりは、おもしろそうと思つたことに直感的に生きてきている気がします」

始終、関根さんそのままの自然体で生きていくような印象を受けました。

「保育の記録や文章は就職してからはほとんど書いていませんでした。園内研修の時にエピソードを持ち寄って語り合いましたよみたいなことがあつて、そういう時にちょこっと書いたりはしていたのですが、本当にそれくらいでしたから、久保チームに入つて最後まで悩み続けていました」

「研究チームへは現場の若い保育者の立場としてという感じで参加していいのかなと参加しました。でも実際は若い保育者としての意見みたいなものも特に言えるわけでもなく、チームの話も難しくあまりわからず、最初は何もできてないな、どうしようみたいな感じでした。まあ、それは最後までずつとなんですけど」

自信のなさを抱えながらも、自分を大きく見せようとはせずに自然体の「自分の小ささ」を引き受け、自分の世界を広げていくことができたのはなぜか。久保氏は報告書で、以下のように述べています。

第一に、「（関根さんにとっては）わからない言葉」を使いこなしながら、ゆたかな保育をしてくれる先輩がいたこと。

第二に、そうした先輩たちと法人を超えて、「広い世界」で出会えたこと。

第三に、そうした出会いの場が「基本的信頼」の感覚を与えてくれる場でもあったこと。

第四に、「わからない言葉」を通じて子どもとかかわることで、子どもの新たな一面が見え

てきたこと。

第五に、そうした「第四期」のプロセスを、共に歩んでくれる岩崎さん、城田君といった仲間がいたこと。

第六に、そうして、関根さん自身の中で「勤勉性」の感覚が開花していき、「わからない」こと、すなわち無知を受け入れるだけの「有能感」が開花していったこと。

「学生時代は久保先生と学生として接していたので、先生としての姿しか見たことがなかったのが、久保先生が研究会のチームのメンバーと話している姿とか結構新鮮でした。研究会では久保先生が書いた文章に対してほかの視点から突っ込んでいる人がいたりして、学生時代に見ていた姿と全然違うなって思います。それで学生の立場でないことに気づかされました」

今までは先生としての関係性しかなかった久保先生と、広い世界で出会い直して違った面が見えることで、知っている先生がいる安心感と同時に緊張感もあったのではないのでしょうか。

「それから研究チームは男性ばかりだったので、感じ方が違うとか、話の進め方が違うとか、普通に話している話の内容とかも全然違うと思ったりして、私は女の人の方が話しやすいので、何をしゃべったらいいかわからないみたいな感じはありました」

勤務している保育園は女性が多く、その方がリラックスして話せるという関根さん。そこに

自分の憧れやモデルになる存在である先輩保育者がいるそうです。

「でも、職場以外の人間関係がすごく大事っていうことも思いました。保育園の中だけで話しているのと全然違うふうに見えたりするのがおもしろくて。チームに誘ってもらえたのは本当ありがたいと思えました。職場での話し合いはその子のことを皆が知っている前提での話しやすさはあるのですが、それとは全然違う、違う角度とか視点からの話がどんどんどんどん出てきて、自分の世界の見え方が変わるのかもしれないと。そういうのは園内だけでは得られない体験だったと思います」

久保研究チームには第四期と第六期と、多様な専門性の人たちが集まっていました。女性も関根さん一人だったので、ジェンダーバランスの偏りはあったのかも知れません。

城田 龍さん（杜ちやいると園）の「第四期」

城田さんは保育士を目指して大学に入学し、そこで久保先生と出会います。報告書の振り返りの中で「やりたいことをとことんやる」というこだわりを記しているように、彼は学びたい、やりたいことをやるという熱量を強く持っているため、彼の情熱と同じ熱量でついていける人がこれまでの人生の中で少なかったのでしょう。報告書の中でも、「自分の殻に閉じこもっ

ていた」ことを記しています。

「誰にもわかってもらえなくてもいい」という諦めの殻から飛び出して久保研究チームに加わった彼は、第四期の仲間と出会い、多様な第六期の人生の先輩と出会う中で、新たな「なりたい自分」のイメージができてきたり、仲間と共にやりたいことをとことんやるというステップに進むことができました。インタビューでは、以下のように語っていました。

「学生時代に久保先生と出会って、ゼミにも入って、師匠と言っているくらい久保先生に憧れています。その憧れが今まではざっくりして、いて、久保先生みたいになくさん勉強をして、いろんな知識を持って、願わくばいつか大学の先生になりたいなぐらいに憧れていたんです。でも研究チームに入って、久保先生のように大学の先生もやりたいけど、やっぱり現場を介してやりたいとも思うようになりました。久保先生みたいに知識を蓄えている人はすごい魅力的。なんですけど、それが自分かと言われると少し違って、溝口義朗さんや鈴木秀弘さんみたいな現場と結びつくような人と出会って、そういう生き方もいいなあって思ったり、自分に合っているかもって思ったりしました。

久保先生とがつり理論を交わし合える溝口さんとか、それを誰かが拾ってとか、そういうレベルの人たちが同じ環境にいるという中に入るのは初めてだったので、久保先生の初めて見

る一面を知ったり、チームの中で相乗効果で高まっていくような感じとか、単体で見ると久保先生ではない第六期の久保先生の姿がより際立って見えた感じがありました」

城田さんは、久保チームという広い世界の中で、憧れの久保先生の違う一面と出会い、また別の人生のモデルとなる先輩たちと出会えたことで、より自分らしい保育者としてのありようが見つかりつつある様子でした。関根さんの話と比較すると、女性より男性保育者の方が、保育者のモデルになるような人を身近に見つけることが難しいのかも知れませんが、城田さんは保育者の憧れと出会えていなかっただけでなく、なかなか仲間とも出会えないでいました。

「前から久保先生にはずっと悩みとして出していて、僕も久保先生みたいに仲間がほしいって言ったことがあります。久保先生は『溝口さん、秀弘さんみたいな人が近くにいるのがすごく羨ましいです』と話をしてくれました。僕はそういう人を求めて勝手に大学時代にライバルと出ていた人もいましたし、でも相手から迷惑だっただけから言われましたけど、そんなふうにはずっとずっと求めていたんですよ。そう相談したら久保先生、溝口さん、秀弘さんもそれぞれ年齢が違うし、まあ15年ぐらい待てば仲間が出てくるんじゃないかってアドバイスをしてくれて。だから、気長に今は自分磨きかなと思ってやっていたんですけど、それが長く望んでいたものが久

保チームのおかげで目の前に急に現れたので、本当にありがたかったですね」

久保チームで第四期の憧れの存在と出会えたこと、第六期の多様な憧れの存在と出会えたことが城田さんにとってかけがえのない出来事であったことは、インタビューを通して痛烈に伝わってきました。仲間や憧れの存在と出会えたことで、久保先生を真似て書いていた子どもたちの記録も、より自分らしい文体や表現を模索しながら書くことを始めていました。

「第四期の3人と久保先生だけで勉強会をやる時があって、その時、肌感覚に落とすような言葉遣いをするのも大事だけど、城田さんは例えばエリクソンをまず一点ぐつと突き詰めた方がいいんじゃないか。そうした方がもつと肌感覚の言葉が出てきやすいのでは」と言ってくださって、もつと勉強しなきゃなあって思ったりもしました」

「研究チームで、自分が書いているスタンスを理解したことが一番大きかったです。チームに入る前は書きたいから書いているというぐらいにしか思っていなかったのですが、研究チームで学んだり刺激を受けるうちに、伝える文体とかを分析したり試したりしましたけど、『なんか俯瞰して見てるよね』って言われたりして。保育の時はめっちゃくちゃ感じているのに、書くうとすると一回整理したくなってしまうことに気がついて、自分がそういうスタンスで書いて

いたことを理解できました。それは大きな気づきでしたね」

「僕も実際、自分なりに子どもとまみれていると思っていて、でもそれを文章にする時って言葉が出なくて、言葉で保育していないから、あれ、これどうやって書くんだ？ となってしまう。でも伝えたいんですよ。保育で子どもといる時、僕すごく充実していて、子どもと通じて合っているんだよねというのを伝えたくて。でも書けなかったですね。本当に何回も何回も書き直して。それでもやっぱり自分としては、今までの俯瞰している書き方ではなくて、伝えたいことを書きたいと思うからね」

第四期の真つ只中、求めて学んで模索して悩んで試してもがいている城田さんの姿が美しく、今後の保育者としての成長が楽しみでしかありません。

岩崎真人さん（第一小学童クラブ）の「第四期」

岩崎さんは振り返りの中で「行き場のない勤勉性」を抱いていたことを記しています。情熱の出し方が城田さんとは違いますが、2人とも行き場がない、受け止めてくれる相手がない孤独を感じていたことは共通しています。岩崎さんも久保研究という広い世界に飛び出し、自信がないながらも周囲への信頼感に支えられて成長していきます。そして行き場がなかった勤

勉強を受け止めて確かめ、支えてもらう中で、劣等感に押しつぶされるのではなく、むしろそれをバネにすることで成長していく姿がありました。

「研究チームに入る数年前から、勉強したいなって気持ちが湧いて出てきたんですね。いろんなきっかけがあったのですが、保育を感覚で積み重ねてきて、それが十年ぐらい積み重ねてきた時に、やりっぱなしっていうか、自分がやってきたことに対して言葉での振り返りができていなかったというのがありました。もう一つは、それでも、このままでも日々の仕事はうまく回せてしまうみたいな違和感がありました。」

その時に園長に相談したら『真人君、広い世界を知った方がいい。法人から離れて勉強する機会があるといいかも知れないね』というアドバイスを貰ったのがきっかけです」

3人に共通するのが、勤務している保育園に相談できる存在があること、そして広い外の世界へ出ることを応援してくれる体制があることです。そのことへの感謝があるから、3人とも保育として現場に還元できるように一生懸命学んでいました。

「研究チームに関わって、この2年でたくさんのが変わりました。中でも本音で話す大切さみたいなのは、久保チームにいて強く感じできたことだから、自分の『こだわり』を大切にするために遠慮しちやいけないところもある

という、それは実践できていく気がします。

ただ、最近ぶち当たったのは、本音で話しながら、上立場で本音をぶつけすぎてもううまくいかないこともあって難しいとか、そういうことも思いました。だからこそ、現実的なしながらみから離れた場所で、そういう変な気遣いというのを抜きにして、子どものことを率直に話せたり勉強できる場所が大事だと改めてわかりました。研究チームではすごくシンプルに子どものことを皆で語り合える。保育園以外の人間関係とか場所だからできることなのかも知れないけれど、そこで学んだことを現場でも生かしていけるとも思います」

相手を思いやったり、チームの調和を大切にしたりして、なかなか本音をぶつけることが難しかった岩崎さんが、自分の殻を破ろうとする姿勢が生まれたことが頼もしく思えます。

「研究会はもうなんかモンスターだらけっていうか。宇宙人じゃないけれど、みんな、なんじゃこりやみたいな、頭がパンクするっていう、最初はそういう感じでした。でも久保先生たちの深さが、言っている言葉は難しいけれど、感覚的にはわかるなみたいな。これまで大事にした自分のこだわりとズレてないことを話しているな、みたいな感覚は確実にありました。」

それで、久保先生たちが難しい言葉で言っ

ていることは、こういう感じですかねって自分の言葉で言うと、「うん、全然違う」って叩きめされてへこんだりもして。多分大きく間違っている、でも全然自分の力が足りてないっていう、そういう繰り返しばかりで、楽しかったし辛かった。だけど『自分が変わりたい』っていう気持ちがあったからめげないで発言を続けるようにしていたら、自分のズレている発言から議論が広がることもあって、受け止めてもらえて、これでもいいんだって思えました。

本当に研究チームが世界を広げてくれた。研究が終わり、今猛烈に本を読まなくちゃと思っています。次のなりたい自分のステージに行くためには絶対に必要だと思っています。

あとは久保先生がこの研究チームのリーダーで、そのリーダーがすごく笑っているということに刺激を受けました。その安心感があるからこそ勇気を出して話せるのだろうと思うし、そこは自分もリーダーとして見習いたいと思っています。久保先生が醸し出す空気の中で、溝口さんの自由さというのが議論を深めていくような、そういう『第六期』の先輩方のやり取りを未来の自分のように見ながら、いいところを生かしていきたいという思いを抱いていました」

研究企画委員会臨時委員 城 真衣子

まとめにかえて

久保健太氏への6年にわたる研究委託は終わりましたが、保育・子育て総合研究機構は久保氏に「ナショナル・カリキュラムの研究」をあらためてお願いしています。久保氏を中心に経済・財政学者の伊集守直氏（横浜国立大学大学院教授）と教育学者の山本一成氏（滋賀大学准教授、幼児教育学担当）の3名による「ナショナル・カリキュラム研究チーム」が編成され、令和5年度から本格的な活動が開始されました。

こども施策を社会全体で総合的かつ強力に推進していくための包括的な基本法として、令和4年6月に成立し、令和5年4月に施行された「こども基本法」の理念は、日本国憲法と児童の権利に関する条約の精神に立脚しています。そしてその理念は、乳幼児期の子どもたちのためのナショナル・カリキュラムによって実現されなければなりません。世界の多くのナショナル・カリキュラムは、0～5歳の就学前児童について国が一元的に策定した保育・幼児教育課程で、国の教育施策・制度です。地方行政・施設に一定の裁量を与えられるほかは、基本的に保育・教育の実践は、すべてナショナル・カリキュラムに準拠しなければなりません。

ナショナル・カリキュラム研究チームは、エリクソンの「Insight and Responsibility」（『洞

察と責任』）を読み合うことから始まりました。哲学者・柄谷行人の「交換様式」の概念や、経済人類学者のジェイソン・ヒッケルの「どうすれば、支配と搾取を軸とする経済から生物界との互恵に根ざした経済へ移行できるかを語るう」という呼びかけ、宮大工の西岡常一・小川三夫・塩野米松たちの『木のいのち木のこころ〈天・地・人〉』（新潮文庫、2005年）など、従来の教育・保育研究とはむしろ距離を置き、視野と領域を広くとり、ナショナル・カリキュラムへの多様なアプローチを試みています。それらが3年の年月を経て実を結ぶ時、今回最終報告書が提出された久保氏の研究成果も少なからず力になるに違いありません。

保育・子育て総合研究機構代表 室田一樹

【註】

*1 リーフレット『こどもまんなか社会の実現に向けてこどもの声に耳を傾けよう―「こども基本法」成立の意義と「こども大綱」への期待』（全私保連、2023年3月）参照。



「研究成果報告書」は、HPあおむし通信に掲載しています。